アドミニストレーション　第 23 巻第 2 号　(2017)　ISSN 2187-378X

トランプ現象とアメリカの分極化

白人版ジェシー・ジャクソンの出現と「忘れられた人々」

はじめに

アメリカでは近年、マイノリティに対する差別をなくそうとする運動であるポリティカル・コレクトネスが盛んである。その結果、マスコミ関係者だけでなく一般のアメリカ人も、人種的・民族的・宗教的・性的少数者にかかわる表現には非常に神経を使い、たとえ内心で思ってはいても、抱いている感情を言葉に出せない状況が長年続いてきた。そのパンドラの箱を開けたのが、2016 年大統領選挙で勝利したドナルド・トランプである。

ドナルド・トランプは 2016 年の大統領選挙期間中、終始一貫して、敵を作って徹底的に攻撃し、その攻撃的で洗練さを欠く態度やパフォーマンスは多くの人に不快感を与えた。性差別や人種差別を暗に肯定する差別発言にはじまり、発言内容に事実誤認も例をみないほど多く、また到底実現できないことを平気で政策提言するなど、問題発言の多さと言葉の軽さでトランプの右に出るものはいないであろう。トランプの発言に眉をひそめ、生理的に拒否反応を示す人も多い。しかしそれゆえに、トランプに「よくぞ言ってくれた！」と拍手喝さいし、「トランプは信用できる人間だ！」と支持者の輪が広がったことも確かである。

本稿の第 1 のテーマは、派手なパフォーマンスをし、過激な発言を繰り返したトランプその人から離れ、トランプ陣営が使った選挙戦略の特徴を描き出すことである。第 2 のテーマは、トランプを支持した人々、トランプの言葉を借りれば、「忘れられた人々」とはどういう人々か、それを紹介することである。トランプは過激な演出を行うため、彼の支持者はトランプを主人公とする劇場型政治の虜になった、無知で単純な人々と思われがちである。しかし、ことはそれほど単純ではない。支持者には、切実な思いでトランプに投票した人が多いからである。第 3 のテーマは、アメリカで実施された種々の世論調査結果を手掛かりに、アメリカの世論が人種などのラインに沿って分極化したのを析出することである。まずは、第 1 のテーマであるトランプ陣営の選挙戦略の特徴を描き出す作業から始めよう。

第1節　共和党主流派の党再建戦略

2016 年選挙の 4 年前と 8 年前の選挙で立て続けに敗北した共和党は、政権奪還を目指し、共和党が成長するために必要な改善点を探った 97 頁からなる画期的な報告書、「成長と夢プロジェク

ト」（Growth & Opportunity Project）を 2013 年 3 月に発表した。この報告書を作成したのは共和党全国委員会（RNC）で、当時の全国委員会委員長はラインス・プリーバスである。

この報告書には、多くの人の意見が反映されている。報告書作成にあたり、執筆者たちはワシントン内外の 2600 名以上の人にヒアリングを行っているが、その中には有権者、技術的な専門家、民間の管理職、党員、政治家も含まれている。アイオワ州やオハイオ州で熱心な共和党員でありながらも、現在の共和党に満足できず、共和党支持を止めた人にも意見を聞いている。また 2000 人のヒスパニックの共和党支持者にも世論調査も行っている。さらに独立した世論調査機関に相談し、州レベルや全国レベルでの世論調査も行い、36000 人以上の人がオンラインでこの調査に協力している。

この報告書は、次のような問いかけから始まっている。共和党は過去 6 回の大統領選挙のうち一般得票で 5 回敗北しており、民主党が 4 回政権をとっている。しかしそれ以前の 1968 年から 1988 年にかけて、共和党は 6 回の選挙で 5 回勝利している。この報告書は、1980 年の大統領選挙で勝利したロナルド・レーガンを共和党のヒーローと位置づけ、第 2 のレーガンを誕生させる方法を模索している。共和党を再生させるためには、共和党は先ず大企業寄りの立場を改めなければならない、と指摘している。概略は以下の通りである。

> 共和党員としてのわれわれの仕事は、民間の成長をうながし、国民が政府を当てにしないようにすることである。われわれは、政府は真に困窮している人のために働き、彼らが自分の足で立って生活し始めるように支援することである。共和党は経済のはしごを必死に登ろうとしている人を、手助けしなければならない。中流階級のアメリカ人は上流階級に這い上がろうとしている。われわれはそれを手助けしなければならない。われわれは企業が不正行為をしたときは警笛を鳴らし、企業が富を独占しているときは攻撃しなければならない。企業が破産するとき、一方でトップの企業経営者がボーナスをもらい、他方で多くの労働者を解雇しようとしていれば、声をあげねばならない。

すなわち、要点は以下の 3 点に纏めることができる。第 1 に、共和党は一般の人のことをまったく考慮していないと思われているので、その点を是正しなければならない。この点を改善するためには、第 2 に、党の理念や政策を一般の人々の生活と結び付ける必要がある。第 3 に、共和党は企業に甘すぎるので、これまで以上に企業にも監視の目を向け、厳格に対応すべきである。

以上のように、共和党は勤勉に働く人たちの政党であるべきと宣言している。しかしこの報告書が共和党再建の鍵として最も重視したのは、「白人政党からの脱皮」である。要点は以下の通りである。

> アメリカは人口構成が急速に変化しているので、共和党もそれに対応していかないと、民主党にますます有利に働くようになる。1980 年の出口調査によれば、投票人口の 88%は白人であったが、2012 年には白人の比率は 72%に低下し、ヒスパニックは逆に 2000 年には 7 %、2004 年には 8%、2008 年には 9%、2012 年には 10%にまで上昇した。ピュー・ヒスパニック・センターによれば、2050 年には白人は国民の 47%、ヒスパニックは 29%、アジア系は

9%になる予想である。

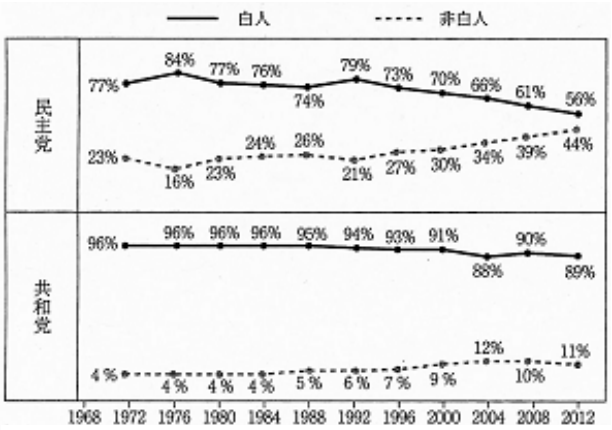
われわれはエスニック・マイノリティの人たちに共和党を支持してもらいたいならば、われわれは彼らと関係を持ち、われわれは彼らに誠意を示さなければならない。共和党の候補者たちがヒスパニックにアメリカにいてほしくないという印象を与えたら、ヒスパニックの人たちはわれわれに関心を示さなくなるだろう。しかしブッシュ大統領など、ヒスパニックから多くの票を獲得した政治家がいるので、彼らを手本にすべきである。たとえば包括的移民改革法は共和党的な政策にも合致するので、それを支持すれば、党としてヒスパニックに重要なメッセージを送ることができる。

若者も、共和党からますます離れている。18－29 歳の有権者で共和党に好感を抱いているのは、3 人に 1 人にすぎない。逆に若者の 3 人に 2 人は、民主党に好感を持っている。

要するに、共和党を 1980 年代のように再生させるためには、共和党は白人政党から脱皮し、人口の 37%を占めるマイノリティを積極的に取り込んでいくべきである、という主張である。共和党を再建させるための戦略の理念は、実際、2016 年の共和党の大統領予備選挙に出馬した顔ぶれに見事に反映されている。最有力候補と見なされた元フロリダ州知のジェブ・ブッシュの場合、妻はメキシコ生まれのヒスパニック系移民で、またジェブ本人はキューバ系移民と共同で経営した不動産業で財をなしており、ヒスパニックとの結びつきが強いからである。もう 1 人の有力候補のマルコ・ルビオはフロリダ州選出の連邦上院議員で、両親はキューバからの移民であり、共和党主流派でありながらヒスパニック票が狙える好位置にいるからである。ベン・カーソンは黒人の医師で、黒人票が狙える立場にいる。テキサス州選出連邦上院議員のテッド・クルーズは、父がキューバ出身の移民で、牧師であった父親の強い影響下で育ち、息子のテッドも非常に厳格なクリスチャンである。その結果、テッドは進化論や人工妊娠中絶や LGBT に反対する典型的な宗教保守のリーダーとして頭角を現し、宗教心が強いアメリカでは、テッドは宗教票を軸に白人とマイノリティとの連合勢力を構築できる政治家として期待されているからである。すなわち、2016 年の共和党の大統領予備選挙に出馬した面々は、いずれも共和党の「白人政党からの脱皮」に相応しい候補であった。

この報告書は「白人政党からの脱皮！」を党再建の戦略として掲げたが、この提案の意味を理解しようと思えば、共和党と民主党の支持者の人種的構成、すなわち白人とマイノリティの比率を知っておく必要がある。グラフ（1）を見れば明らかなように、過去半世紀、共和党は一貫して支持者の 90%が白人で、白人の政党に党のアイデンティティを見いだしてきた。経緯は、以下の通りである。1950 年代から 60 年代にかけて、キング牧師に率いられた公民権運動が南部で影響力を拡大し、民主党のケネディ政権とジョンソン政権がこの運動を支援した。その結果、一方では黒人の 8 割以上が民主党を支持するようになり、他方、黒人運動の過激化や都市部での「黒人暴動」等に反発した白人は、支持政党を民主党から共和党に変えていった。その後も共和党は黒人だけでなくヒスパニックに対しても厳しい態度で臨んだため、共和党は一貫して白人の政党であり続けたのである。

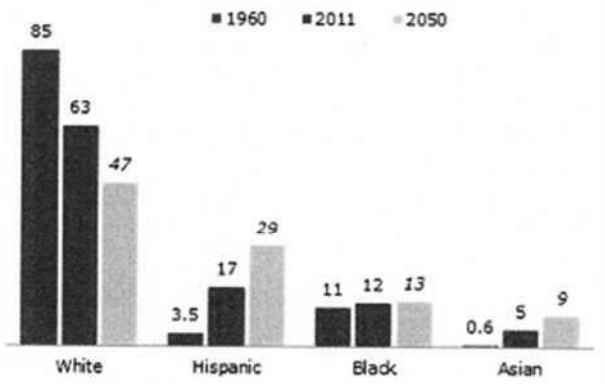
グラフ(1)　大統領選挙で民主・共和党に投票した人の割合



出典：西山隆行『移民大国アメリカ』筑摩書房 2016 年　52 頁

しかし、アメリカ国民の人種的構成は急激に変化しており、共和党としてもこの人種構成の変化を無視できなくなった。グラフ（2）を見てみよう。1960 年には白人はアメリカ国民の 85%を占めていたが、半世紀後の 2011 年には 63%に低下し、2050 年には推計で 47%にまで下がり、白人は少数派に転落することになる。支持者の 90%を白人票に依存している共和党としては、これは衝撃的な数字である。共和党全国委員会が選挙戦略の方針転換を打ち出したのも、当然であった。

グラフ(2) 人口の人種構成の推移



出展：The Society Pages,
U.S.Racial/Ethnic Demographics: 1960, Today, and 2050
Nov, 14, 2012

2013 年に共和党全国委員会が打ち出した党の再建戦略は、党の伝統的な政策を自己批判し、党の新たな理念を掲げた画期的な提案であった。表現を変えて言えば、「白人政党からの脱皮」を唱えた共和党主流派の戦略は、共和党の「民主党化」と言えなくもない。民主党は支持者の 55%が白人、残りの 45%がマイノリティで、共和党も民主党のように多人種・多民族からなる政党に脱皮しようとしたのである。民主党も共和党も、ともにマイノリティ票を激しく奪い合う事態となった。

その結果、共和党からも民主党からも顧みられなくなったのが白人であり、とりわけ経済成長から取り残された内陸部に住むミドルクラスの白人労働者である。トランプの表現を借りれば「忘れられた人々」であり、2 大政党から見捨てられた白人労働者である。

第2節　トランプ陣営の対抗改革戦略

このように、共和党全国委員会は2013年に選挙戦略の大転換を打ち出したが、トランプはツイッターでその改革案を嘲笑し、共和党全国委員会が提唱した戦略とは正反対の戦略を採用した。すなわち、トランプ陣営はヒスパニックや黒人等のマイノリティに手を差し出すどころか、これらのマイノリティ集団への敵意を露わにし、彼らを逆に刺激したからである。

たとえば、メキシコや中南米からメキシコ国境を越えてくる不法移民に対しては、「メキシコ政府に国境沿いに壁をつくらせる」、「不法移民は麻薬の売人でギャングだ」、「不法移民を強制送還する」等々の発言を繰り返し、ヒスパニック系不法移民をスケープゴートにた。不法移民 1100万人の大半はヒスパニックで、メキシコ国境に接する諸州に集住しているので、そのような発言をすることで、トランプはこの地域に住む白人からしばしば熱狂的に受け入れられたのである。しかも、合法であれ不法であれ、かつてはこの地域に集住していたヒスパニックも、最近は全米の諸州に分散している。したがって、全米に散らばったヒスパニックは外見では不法移民か合法移民か識別できないため、不法移民問題は今や全米で白人から重要な問題として受け止められるようになった。

また、白人警官が黒人青年を射殺する事件が頻発し、黒人による抗議行動が全米に広がっている只中で、トランプは白人有権者に向けて、警察による厳しい取り締まりを意味する「法と秩序」を敢えて連呼した。黒人社会からの反発を承知で、トランプは敢えて黒人を刺激するスピーチを繰り返し、白人社会から熱く支持されることになった。アラブ系住民やイスラム教徒に対しては、テロリストになる可能性があるとの理由からイスラム教徒の入国を禁止すると宣言し、さらにアメリカ国旗を燃やすような人物は刑務所に入れるとも発言している。トランプは不法移民、移民、黒人、難民等に厳しく対応する姿勢を鮮明に打ち出せば打ち出すほど、したがってマイノリティからの反発が強くなればなるほど、トランプは共和党支持者の枠を超えて白人労働者から熱狂的に支持されるようになった。

前述したように、共和党は1960年代後半以降一貫して白人政党であり続け、支持者の9割は白人でマイノリティの支持者は1割に過ぎない。トランプはマイノリティに対して差別的発言を繰り返すことによって、敢えてマイノリティ票を放棄し、共和党支持者の白人だけでなく、民主党をこれまで支持してきた白人票も取り込もうとしたのである。すなわち、2016年大統領選挙において、トランプは終始一貫して投票年齢人口の約7割を占める白人有権者に照準を絞って選挙を戦った。トランプは白人の中でもブルーカラー労働者の反マイノリティ感情に訴え、民主党の支持基盤の1つである組合を切り崩そうとしたのである。

1984年と1988年の民主党の大統領予備選挙で、黒人のジェシー・ジャクソンは白人社会を烈しく糾弾することで黒人社会から熱烈な支持を獲得するのに成功した。トランプはいわばその白人版であり、連邦政府の寛大なマイノリティ対策を批判することで、白人社会から支持されたのである。

地図（１）　トランプが勝利した州（濃い色）とクリントンが勝利した州（薄い色）

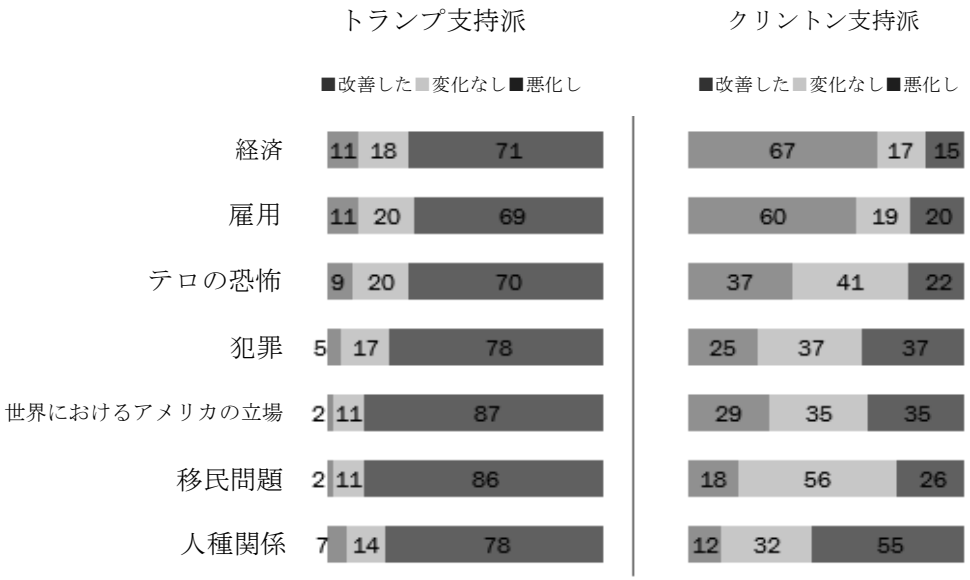
出典：POLITICO, 2016 Presidential Election Results, Dec. 13, 2016

トランプが勝利した州（濃い色で塗った中心部の諸州）とクリントンが勝利した州（薄い色で塗った東西の沿岸諸州）を、地図（１）で見てみよう。トランプが勝利した州は、基本的に人口密度が低く農村風景が広がっている大陸中央部の広大な地域で､｢錆びついた地域(ラストベルト)｣を中心に経済発展から取り残された雇用の喪失に苦しんでいる地域である。人種的には圧倒的に白人社会である。また南西部諸州にはヒスパニックが集住し、南東部諸州には黒人が集住しているので、深刻な人種問題を抱えている地域である。トランプはこれらの地域で、雇用の創出、不法移民への国外追放、治安問題等を前面に打ち出したのである。逆にクリントンが勝利した地域は沿岸部の経済成長が著しい地域で、大都市圏が形成され、人口密度が高い多人種・多民族の社会である。

第3節　トランプを支持した「忘れられた人々」

トランプは、なるほど過激な発言を繰り返して「トランプ現象」を巻き起こした。しかしトランプの派手なパフォーマンスとは裏腹に、トランプに投票した有権者（は現状に対して幻滅や強い怒りの感情を持っていると言われている。ピュー・リサーチ・センターが投票日直前の 2 週間に実施した世論調査は、その点を雄弁に物語っている。

グラフ（３）過去 8 年間に関する現状認識

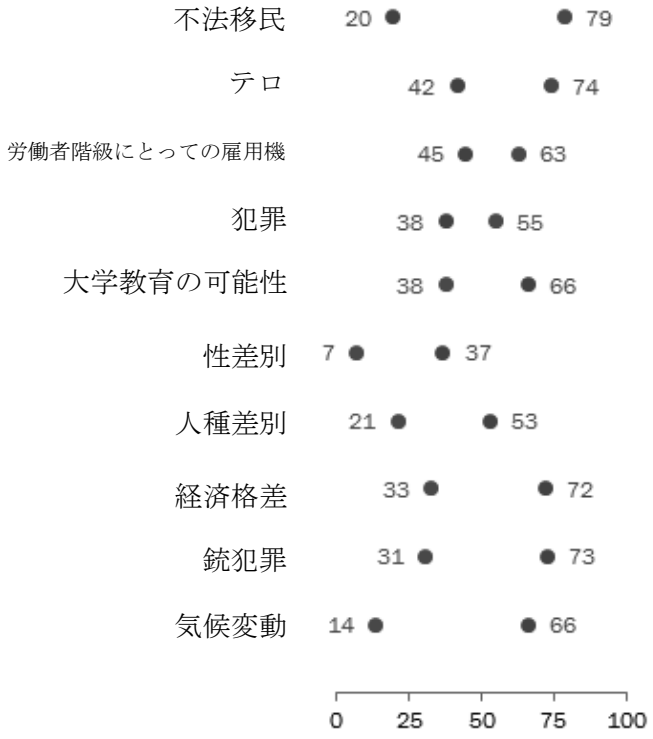


グラフ（３）は、「過去 8 年間に、アメリカはどのように変化したと思いますか」という質問に対する、トランプ支持派とクリントン支持派の回答である。トランプ支持派は、経済、雇用、テロの恐怖、犯罪、移民問題、人種問題などの項目すべてで、概して 70%～90%の人が「悪化した」と回答している。つまり、トランプ支持派には世の中の変化を悲観的に見ている人が圧倒的に多いのである。しばしば指摘されるように、トランプ支持者には生活環境への不安と現状への強い不満がある。トランプ支持派から見れば、過去 8 年間のオバマ政権時代、状況は「悪化した」ということになる。

それとは対照的に、クリントン支持派になると、「悪化した」と回答した人の比率は、経済（15%）、雇用（20%）、テロの恐怖（22%）、犯罪（37%）、移民問題（26%）となっている。クリントン支持派は世の中への満足度がきわめて高く、将来に対して明るい展望を持っているのが特徴である。つまり、クリントン支持派は、オバマ政権時代に状況は現状維持ないしは改善したと見なしている。

次のグラフ（４）は、「アメリカにとっての重大問題とは何か」を問うた調査結果である。トランプ支持者（黒丸）はアメリカにとって重大な問題として、不法移民、テロ、雇用、犯罪を重視しており、それぞれの項目でクリントン支持派を 79%対 20%、74%対 42%、63%対 45%、55%対 38%と、大きく引き離している。それに対してクリントン支持派（白丸）は大学進学、性差別、人種差別、銃犯罪、気候変動等と回答し、それぞれの項目でトランプ支持派を 66%対 38%、37%対 7%、53%対 21%、73%対 31%、66%対 14%と大きくリードしている。クリントン支持者にはフェミニスト、移民と黒人、都市圏の生活者等が多いからである。トランプ支持派とクリントン支持派とでは、争点そのものとその順位づけが大きく異なっており、問題関心が大きくズレていることが、このグラフからも見て取れる。

グラフ（4）　アメリカにとっての重大問題



出典：Pew Research Center, A Divided and Pessimistic Electorate, Nov.10.2016

トランプ支持者とクリントン支持派は、たんにアメリカに対する現状認識が違っていただけではない。それにとどまらず、この 2 つの支持者グループは規範の領域、具体的には「あるべきアメリカ像」なり「あるべきアメリカ人像」でも大きく異なっている。

グラフ（5）　NRA、フェミニスト、LGBT、BLM への態度

NRA：全米ライフル協会

BLM：Black Lives Matter 黒人の命も大切
LGBT：性的少数者

出典：Pew Research Center, A Divided and Pessimistic Electorate, Nov.10.2016

グラフ（５）は、全米ライフル協会、フェミニズム、LGBT（性的少数者）、Black Lives Matter（黒人の命も同じように大切）に対する 2 つの支持派の価値観の違いを表したものである。トランプ支持派とクリントン支持派とでは、居住環境と価値観が明らかに違っていることがわかる。民主党ないしはクリントンの支持者の約 45%は、黒人とヒスパニックなどの人種的少数者と、フェミニストと LGBT（性的少数者）などから構成されているため、フェミニスト、LGBT の権利、BLM 運動に対する評価は、2 つの支持者の間で 38%対 5%、66%対 24%、53%対 6%と、極端に異なっている。

さらに、グラフ（６）からも明らかなように、トランプ支持者には地方に住んでいる人が多いため、自分たちが子供の頃から慣れ親しんできた世界が目の前で崩壊しているという危機感が強い。自らを「伝統的」「大切な価値観は名誉と義務」「典型的なアメリカ人」を自負する人が、それぞれ 72%、59%、72%いる。それに対して、クリントン支持者には移民と都市圏の生活者が多いため、それぞれ 31%、35%、49%にすぎない。

グラフ（６）トランプ支持派とクリントン支持派に見られる生活態度の調査

出典：Pew Research Center, A Divided and Pessimistic Electorate, Nov.10.2016

おわりに

2016 年のアメリカ大統領選挙では、トランプの派手なパフォーマンスや差別的な発言に目を奪われた。しかしドナルド・トランプとヒラリー・クリントンという 2 人の候補者のパーソナリティや演出からいったん離れ、彼らの支持者に目を転じると、アメリカ社会に存在している深い亀裂が忽然と表れてくる。トランプ支持者とクリントン支持者は、現状認識でも価値観でも大きく違っているからである。

特に、主要メディアの記者にはいわゆる都市在住のリベラル派が圧倒的に多く、都市部に集住

しているマイノリティの貧困や失業問題を熱心に報道してきたが、彼らは白人社会が抱える深刻な社会問題には見向きもしなかった。それに対して、トランプは二大政党に所属する政治家や主要メディアから無視され続けてきた「忘れられた人々」に語りかけ、彼らと向き合ったことは確かである。